

日本における病院内医薬分業の始まりは大阪府立病院から（明治六年）

中 室 嘉 祐

文久元（一八六二）年日本最初の洋式病院長崎養生所が開院し、日本各地の大名などから派遣された藩医、志士、医学生たちが多数留学して、洋学や西洋医学の教えを受けた。オランダ海軍二等軍医ポンペ J.I.C. Pompe は幕府の西洋医学伝習所教官をも兼ねていたが、ポンペの臨床教育は多数の学生を三ヶ月交代で処方箋記載、包帯学、薬室における調剤、食事と入浴の監督、種痘の記載、カルテ・日記の保存などヨーロッパ式の教育を行った。長崎に学んだ医学生は薬室で処方箋調剤を行ったから、西洋医学では医師は調剤できると思ったであろう。「これら医学生は日本各地へ戻り医師が処方箋調剤を行う医薬兼業の西洋医学が、その後広く日本中で行われることになった。明治初期のこれらの病院規則をみると、「入院に際し、患者は日本

刀を病院に預けおくべし」、「入院患者処方箋は後日の証とするため当直医局において厳重に保管すべし（長崎病院）（大学東校病院）」すなわち医師に調剤（処方箋）管理権があり、病院内医薬分業が行われていないことがわかる。幕府の西洋医学所は大学東校となり、東京帝国大学となり、明治四年ドイツ軍医ミュレル L. Mueller 陸軍少佐、ホフマン T.E. Hoffmann 海軍少尉らの教官が着任し医学教育に専念したが、明治四一（一九〇八）年勅令一四一号により東京帝大病院に薬局長が発令されるまでは、東京帝大では医局に調剤管理権があり、病院内医薬分業が行われなかった。他の帝国大学病院に薬局長が発令され病院運営が近代化されたのは、その後のことである」

文久二年ポンペの後任にはオランダ陸軍一等軍医ボードウィン A.F. Baudin が着任し、ポンペ同様熱心に医学教育と診療を行った。明治となりボードウィンは浪華仮病院（国立大阪医学校病院）へ移った。同校は明治五年文部省の全国的な学制改革により廃校となった。洋式病院の再建を望む熱心な大阪府民の寄付金を基に、明治六（一八七三）年二月一五日府立大阪病院（後の阪大病院）が西本願寺北

御堂境内に新築開院し、前年廃校となった国立大阪医学校病院より高橋正純が院長に、オランダ人医師エルメレンス C. J. Ermacins が教師に就任した。エルメレンスは毎朝オランダ語の医学講義を行った（この講義の中で日本最初の栄養学教育、すなわち蛋白質・脂質・糖質・無機質の四大栄養素の重要性を講述した「日本医史学雑誌、第三一卷、第二号、八五頁」）エルメレンス指導になる日本最初の近代的な病院運営規則である「大阪府病院各局規則」が開院当日公布された。

医局規則と対等に定められた薬局規則により、医局で発行した入院・外来処方箋を薬局長の管理する薬局で調剤を行う、日本で最初の完全な病院医薬分業が府立大阪病院で始まった。

薬局規則によれば「薬剤は入院患者の配剤録（処方簿）により調査し、外来患者の方書（処方箋）によって調査すべし」、「総て薬剤の製煉及び配合は一切司薬生（薬剤師）自ら行い、習熟の召使たりともこれに取扱せ候事堅く厳禁たるべき事」、「劇薬類は他薬と混雑せざるよう別に箱中に納め薬局長その開閉を司るべき事」とあり、医局の医師の発行

する入院処方箋・外来処方箋を薬局長の管理する薬局の薬剤師自ら調剤する病院内医薬分業の規則が定められ、薬局の使用人は如何に習熟していても（患者の生命の尊さから）調剤・製剤することを厳禁している。

〔この病院は後、府立大阪医科大学病院さらに、大阪帝国大学病院へと発展するが、第二次大戦中、男子薬剤師の急減から調剤製剤を薬剤師で完遂するため、男女同一条件（調剤・製剤、深夜の宿直、待遇等）にて女子薬剤師採用許可を昭和一四年院長より得て、終戦時には数十名の女子薬剤員が阪大薬局で活躍していた（のち昭和六一年政府は男女雇用均等法を施行した）。一方女子薬剤師を採用しなかつた東北帝大病院では戦時中、高等女学校卒業生十数名を調剤補助員として任用して同院薬局調剤室において医師の処方箋を調剤させていた〕

（なお府立病院規則によると、開院当日、エルメレンス指導のもとに、日本最初の正式な病院給食が直営で開始された「日本医史学雑誌、第三二巻、第二号、九八頁」）

〔府立大阪病院の薬局長の管理する薬局での薬剤師による病院内医薬分業の制度は、全国の県立病院の制度として、

当時の政令がまず東京、京都、大阪の三府に布達して後、他の県に通達する情勢から、次々と県立病院で病院内医業分業が始まる基となった」

長与専齋らが欧米を視察してまず東京、京都、大阪の三府に布達した毒劇薬取締（明治七年九月）、医制（明治七年八月）より一ケ年以上も前に、一人のオランダ人医師エルメレンスの指導により大阪府病院では近代的な病院運営が行われていたことは驚嘆に価する。

帰国したエルメレンスは明治一三年二月一日南仏旅行中客死し、その報を悲しみ府民有志は醸金して中之島公園に巨大な記念碑を建てて彼の徳を称えた。今、碑は中之島の大阪大学医学部玄関前にある。

（元大阪帝国大学医学専門部・奈良佐保女学院短期大学）

明治初期の翻訳育児書

小嶋 秀夫

家庭向けの子育ての書に関する限り、明治以前のわが国には、西洋の直接的影響は僅かであった（Kojima, 1986）。筆者は八十五回総会において、江戸期の一般向けの子育ての書が幼い子どもをどのような存在にとらえ、どのように取り扱うべきだとしたかをまとめて報告した。そこには、素朴なものだが児童発達理論というべきものが存在していた。

では、その「理論」の明治維新後における連続性と変化はどうであろうか。社会組織が変わり、国家や個人々の目標が設定し直され、さらに、欧米の育児法に関する情報が流入してくると、当然、育児についての考えや方法にも変化が出てくると考えられる。西欧の理論と方法を摂取する過程の中で、従来の「理論」はどのように機能したのであるろうか。江戸期の子育て論者たちが中国の理論や方法を取